

和刻本『海国図志』諸版における 底本の校正に関する一考察

戸谷 将義

はじめに

『海国図志』は魏源の撰による世界各地の地理・歴史・政治情勢を掲載した書物である⁽¹⁾。初版の50巻本は1844年に揚州にて刊行され、その後も巻数を増やした版本が出版された。荒川(1997:241)に、『海国図志』は「アヘン戦争中林則徐が広東で訳させたイギリスの地理学者マレーの地理書の抄訳『四洲志』を骨格とし、これに中国の正史等にみえる外国についての記載、『海録』『海国聞見録』等、中国人によって書かれた海外についての書物、さらに西洋人の手になる書物から関連箇所をぬきだし編集したものである」とあるように、内容は主に従前の文献からの引用により成り立っている。

『海国図志』については、版本の種類や日本での翻刻についてのすぐれた研究成果がすでに数多くある。幕末の日本へ舶来し、二十数種類の和刻本が刊行され、海外知識の摂取に大いに役立ったこともよく知られている⁽²⁾。また、和刻本の底本となった版本については、60巻本であることが多くの先行研究で指摘されている。ただ、60巻本は1847年版と1849年版があり、そのどちらが底本となったかという点に言及した先行研究は少なく、また、原文献の1847年版と1849年版にある文字の異同の具体的な違

(1) 魏源は1794年4月23日(乾隆五十九年三月二十四日)生まれ、湖南省邵陽県出身。大谷(2015:62)によれば、1840年(道光二十年)のアヘン戦争の最中、魏源は鎮江でイリへの赴任を命ぜられた林則徐と会い、そこで『海国図志』の刊行を委嘱されたという。

(2) 源(1993:18)は23種の和刻本の形式について、「(1) 塩谷宕陰・箕作阮甫の協力によってなされたような原文の事実の誤りを正し、さらに原文の誤植を直し、その上で訓点を施した「校訂本」ともいうべきもの4、(2) たんなる訓点本3、(3) 書下し文にした「和訳版」16」と三種類に分類している。

いについてもあまり踏み込まれてはいない。本論文は、文献の成立年代の正確性を確保することを目的とし、和刻本の底本の刊行年について再検討する。そのうえで、和刻本における校正の記述をもとに、『海国図志』の1847年版と1849年版の間の文字の異同について具体的に検証し、和刻本がそれらの異同をどのように解釈したかを考察することとした。

本論文では、旧字体・異体字は現在通用の字体に改めた。和装本の頁数については、「5葉オ3」「12葉ウ6」のように、「表」を「オ」、「裏」を「ウ」とし、「オ」あるいは「ウ」の後ろの数字は右からの行数を示すこととした。

I 『海国図志』の書誌について

1 『海国図志』の諸版本

『海国図志』の版本は荒川（2018：49）によると次のとおり六種類ある。

- ①1844年 50巻本（以下「1844年版」とする）
- ②1847年 60巻本（以下「1847年版」とする）
- ③1849年 60巻本（以下「1849年版」とする）
- ④1852年 100巻本
- ⑤1876年 100巻本
- ⑥1895年 125巻本

①～⑥のうち、和刻本の出る以前に刊行された50巻本と60巻本の書誌について、次節以降でより詳しく見ておきたい。

2 『海国図志』50巻本の成立年代

初版の50巻本（1844年版）の完成時期あるいは刊行時期を1842年とする先行研究が多数ある⁽³⁾。確かに、魏源による序文の末尾には“道光二十有二載歲在壬寅嘉平月”と書かれており、“道光二十二年”は大部分が西

(3) たとえば、増田（1979：43-44）は『図志』の原刻は五十巻で、道光22年（1842）に出ていて、それを増補したのが六十巻本である」と述べ、小田切（2008：5）は「魏源の『海国図志』（1842刊、後に増補されていった）」とする。阿川（2011：5）は「その版本には50巻本（道光22年〔1842年〕）」があるとし、田野村（2019：1）も「魏源撰『海国図志』には1842（道光22）年刊の50巻本」があると述べる。

暦1842年であるため⁽⁴⁾、“道光二十二年”を西暦換算すると1842年になるのだと言われることが多いが、50巻本の刊行年が1842年であることは既に誤りであることが佐々木（1985）によって指摘されている。

佐々木（1985：158）は序文の“嘉平月”に着目し、“嘉平月”が「十二月」であることをふまえ、「この序文の日附は明らかではないが、道光二十二年十二月一日は西暦では1843年1月1日になるから、「海国図志」の完成は西暦では1842年ではなく、1843年1月になる」と述べ、魏源が序文を書いた時期を1843年1月と指摘している。下河部（2000：367）が佐々木の結論を引用し、茂木（2013：97）も同様に「これはまず1843年50巻本としてまとめられ（44年刊）」たとし、序文の執筆時期と刊行年を分けて認識している。1844年版は序文の前にいずれも“道光甲辰仲夏古微堂聚珍板”とあることから⁽⁵⁾、この“道光甲辰”の“仲夏”（五月）すなわち1844年を刊行年ととらえるのが適切であろう。荒川（1997：242）は *Chinese Repository* および Wylie（1867）の記述をもとに⁽⁶⁾、「在華西洋人たちが一般に『図志』を目にしたのは1844年のことであったといえる」と述べており、市中に出まわったのが1844年だと考えるのが適当だと思われる。

3 『海国図志』60巻本の成立年代

60巻本は幕末の日本へ持ち込まれ、和刻本の底本となったものであるとされる。しかし、初期の研究においては、版本が1847年版と1849年版の二種類あることはあまり明確にはされておらず、しばしば混同された。

中村（1915：144, 146）は『海国図志』について「道光二十四年即ち我弘化元年に初版を公にし、道光二十九年即ち我嘉永二年に増補の再版あり。其後第三版あり。初版は六十巻なりしも後には一百巻となれり」とするが、

(4) 方诗铭・方小芬编著（1987：699）によると、道光二十二年は西暦でいえば1842年2月10日から1843年1月29日である。

(5) 2部の50巻本の原本（愛知大学図書館所蔵本・中国上海図書館所蔵本）を確認した限りでは、どちらも“道光甲辰仲夏古微堂聚珍板”であった。

(6) *Chinese Repository*, No. 16 (1847: 419) “Review of the the Hai kwoh Tu chi” には “Thus decked out this work finally appeared, in the summer of 1844” とあり、Wylie（1867：53）でも “海国図志 Hae kwo t'oo che, which was given to the public in 1844” と書かれており、いずれも『海国図志』50巻本の出現を1844年としている。

和刻本の底本については「塩谷宕陰、箕作阮甫の二先哲等が海国図志を訓点翻刻せし」と述べるのみで、具体的にどの『海国図志』の版本を底本としたかについては言及がない。尾佐竹（1932：53）には「海国図志は阿片戦争の大立物たる林則徐の原輯、魏源が更輯し、道光二十二年の発行に係る、漢文で書かれた世界地理書の最も完備したものである。これを翌年、塩谷宕陰が翻訳し訓点を附して出版した」とあり、魏源の序文に書かれた“道光二十二年”のみを発行年と見ているため、それだけで底本の版本を特定することは難しい。続く尾佐竹（1934：20）には、「魏源が諸書を輯録し道光二十二年『海国図志』と題し道光二十七年増補出版した。（中略）川路聖謨、部下をして翻訳せしめ箕作阮甫、塩谷宕陰、共同して其重要部分を訓点校正し嘉永七年より安政二年に亘りて翻刻出版し」と、道光二十七年すなわち1847年版が底本になったというように読み取れる記述もある⁽⁷⁾。鮎澤（1953：137, 140）は「日本の刻本はいずれも六十巻本が原本になっている」とし、また「原書は「道光己酉夏・古微堂重訂」本である」と述べ、『海国図志』和刻本の底本となった版本が“道光己酉夏”すなわち1849年に出版されたものであることにここで初めて言及されたといえる。

鮎澤（1953）以後の研究で、版本の違いに言及したものはきわめて少なく、佐々木（1985：181）は「我が国で翻刻された「海国図志」を見ると、扉に「道光己酉（二十九年）夏古微堂重訂」とあるから、我が国へ入って来たのは道光二十七年刊の六十巻本ではなく、二十九年刊の重訂本であったに相違ない」と版の違いについてのみ述べ、具体的相違についての指摘はない。唯一、荒川（1997：275）は1847年版と1849年版という二つの版本間でテキスト本文の違いがあることに言及しており、「60巻本の47年版と49年版は同じ版木を用いたものではなく、文字の異同がみられる」と述べる。

この「文字の異同」とは具体的にどのような違いなのか。また、日本へ舶来した『海国図志』が和刻本として再編集される際にこの「文字の異同」はいかに認識されたか、という疑問が新たに生じる。

(7) 尾佐竹（1934）は吉野作造の「本書推薦の辞」のある尾佐竹（1925）の再版であるが、引用箇所の記事内容は尾佐竹（1925：20）ともに同じである。

和刻本『海国図志』諸版における底本の校正に関する一考察

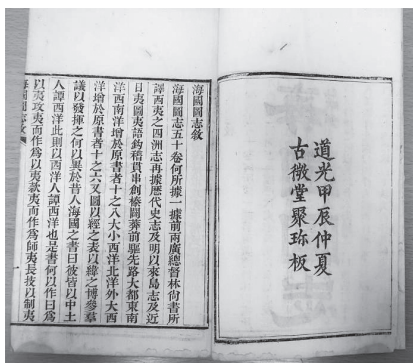


図1. 『海国図志』50巻本

「敘」は道光二十二年嘉平月（1843年）
扉裏に道光甲辰（1844年）
愛知大学豊橋図書館所蔵
請求記号：292.2:W90

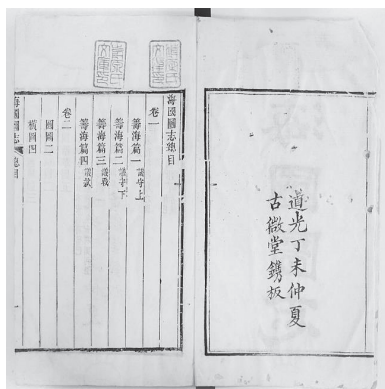


図2. 『海国図志』60巻本1847年版

「敘」は道光二十七年載（1847年）
扉裏に道光丁未（1847年）
秋市立秋図書館所蔵
請求記号：290-カ2

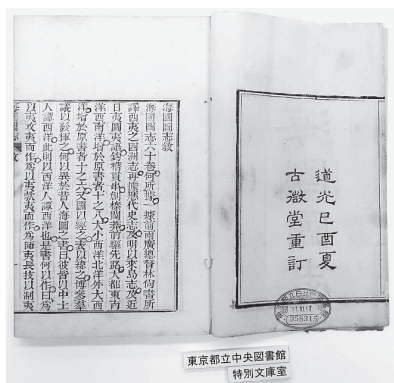


図3. 『海国図志』60巻本1849年版

「敘」は道光二十七年載（1847年）
扉裏に道光己酉（1849年）
東京都立中央図書館特別文庫室所蔵
請求記号：市村文庫390-IW-1

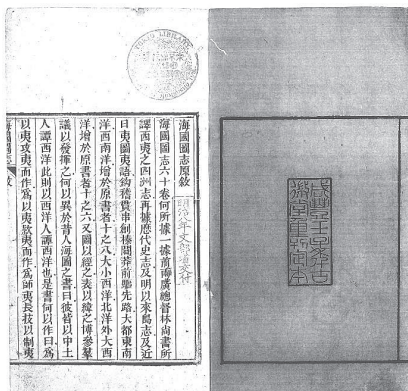


図4. 『海国図志』100巻本

扉裏に道光壬子（1852年）
国立国会図書館所蔵
請求記号：170-1

II 二種の60巻本の比較

本節では、『海国図志』の60巻本の二つの版本に存在する文字の異同等の特徴を、実際の文献原典を閲覧して確認し⁽⁸⁾、第Ⅲ節では、本節の結果を踏まえ、さらに文字の異同が和刻本にどのように反映されているかを具体的に検証していく。

1 刊行年

刊行年については、巻頭にある序文を見る限りでは、どちらの版本にも“原刻僅五十卷今増補為六十卷道光二十七年載刻于揚州”とあり、道光二十七年（1847年）に50巻本から60巻本に増補されたことがわかる。ただ、標題紙裏には、1847年版は“道光丁未仲夏古微堂鐫板”と書かれているが、1849年版は“道光巳酉夏古微堂重訂”となっており、“道光丁未”は西暦1847年、“道光巳酉”は西暦1849年ということで、年が異なっている。ここが1847年版と1849年版を分ける根拠である。

2 闕字と台頭

序文を見ると1847年版と1849年版はどちらも“聖祖”“列祖”“国朝”“詔”等のことばの上を空ける闕字が見られる。この闕字については1847年版と1849年版は共通している。一方、台頭は1849年版の序文のみに見られ、1849年版の序文2葉オ6の“皇仁”および2葉オ7の“列祖”のみ他の行より高い位置に上げられている。この台頭は1847年版には見られない。したがって、この台頭の有無が1847年版と1849年版を見分けるひとつの目安となる。ただし、この台頭は最初から最後まで首尾一貫したものではなく、1849年版の序文以外では見られない。

(8) 本論文の執筆にあたっては、1847年版を主に台湾成文出版社の影印本で確認し、原資料は中国国家図書館古籍館所蔵本（請求記号：地900-875.2）を閲覧した。また、萩市立萩図書館所蔵本（請求記号：290-カ2）の萩デジタルアーカイブに公開されている電子ファイルも確認した。1849年版は、東京都立中央図書館特別文庫室所蔵本（請求記号：市村文庫390-1W-1）を閲覧した。

3 誤字

『海国図志』の「籌海篇」に訓点を施した塩谷宕陰は、『海国図志 籌海篇』の序文で「此書為客歲清商始所舶載。左衛門尉川路君獲之。謂其有用之書也。命亟翻槩。原刻不甚精。頗多譌字。使予校之（この書物は昨年清国商人がはじめて舶載したものである。左衛門尉川路君はこれを得て役に立つ書物だといひ、翻刻を命ぜられた。原著はあまり正確でなく、誤字が多いため、私が校正した）」と述べる。確かに塩谷が翻刻した版本には、底本の誤りを頭注で指摘している箇所が多数ある。その指摘の仕方は、固有名詞等誤りが明らかだと考えられる箇所に対しては「荷當作佛（“荷”は“佛”と書くべきである）」のように明確に正し、確かな根拠はないが文として意味が通らない箇所に対しては「令恐今（“令”はおそらくは“今”である）」のように断定的でない書き方で意味の通るような字を提案している。

4 和刻本における誤字の指摘と校正

塩谷が和刻本の頭注で指摘した底本の誤字は、『海国図志』60巻本の1847年版および1849年版に共通して見られるものであろうか。

塩谷の頭注は、『籌海篇』全2冊で18個、『俄羅斯國・普魯社國』全3冊で123個、『英吉利國』全3冊で55個にのぼる。1847年版と1849年版の両方でこれらの箇所を確認すると、誤字が指摘された箇所は、1847年版のほうは塩谷が正しいと考えた字になっている箇所が多数見られた。つまり、この誤字は1847年版および1849年版に共通したものではなく、1847年版は正しい字であったものが、何らかの要因で1849年版の重刻時に誤った字の多い版本を作ってしまった。そして日本で翻刻する際にその誤った字の多い1849年版を底本にしてしまったということになる。誤字を指摘した塩谷の頭注に「おそらく」と断定的に書けていないものがあることから、当時はより正確なほうの1847年版を閲覧できなかった可能性がある。

III 二種の60巻本と和刻本の間における文字の異同

本節では、1847年版・1849年版・和刻本の三つを対象とし、誤字を手

がかりとして比較し、具体的な文字の異同の状況を検証する。和刻本のうち、塩谷宕陰と箕作阮甫の訓点によるもの（以下、まとめて塩谷箕作本と称す）では、意味の通らない箇所や固有名詞の誤りと思われる箇所が頭注で指摘されている。この塩谷箕作本の頭注を頼りに、1847年版・1849年版・塩谷箕作本の三種を比較していく。塩谷箕作本は、所蔵の確認できる『海国図志 籌海篇』『海国図志 俄羅斯国・普魯社国』『海国図志 英吉利国』の三種を対象とした。

1 『海国図志 籌海篇』上・下全2冊

『海国図志 籌海篇』（国立公文書館所蔵，請求記号：292-0199イ）は、上下2分冊で、60巻本の「海国図志叙」「海国図志総目」「卷一籌海篇」を収録する。

「翻栞海国図志序」と題する塩谷による序文があり、序文の末尾には「嘉永七年歳次甲寅夏六月下浣」（1854年）の記載がある。奥付は「嘉永七年甲寅七月刻」である。森（1968：57-62）は、『海国図志』の各種和刻本について、序文・跋文・奥付等の年月は刊行時期としては「必ずしも正確な記録ではない」とし、国立国会図書館所蔵の『市中取締続類集』を根拠に、和刻本が幕府諸機関の検閲を受け、売り広めが許可された年月を明らかにしている。それによれば、『海国図志 籌海篇』は嘉永七年九月に売り広め許可が出たということである⁽⁹⁾。この売り広め許可年月について、森（1968：58）は「この許可後実際に店頭で販売されるようになる時期は不明であるが、公然と販売できる条件を具えた時点として、一つの基準にしようものと思う」と述べていることから、この時期以降に、市中へ流通したと考えるのが適当であろう。

『海国図志 籌海篇』の頭注は全部で18個あり、底本の誤字を指摘しているものがほとんどである。そのうち7個は、1849年版が誤字のままであるのに対し、1847年版は頭注の指摘どおり正しい字となっている。その

(9) 森（1968：58）によると、『市中取締続類集』は天保改革以降の書籍出版手続きにおける売り広め願いの記録である。森の用いた資料は「国会図書館所蔵の旧幕府引継文書中の「市中取締続類集 書籍之部」であり、これは現在、国立国会図書館デジタルコレクションにて閲覧可能である。塩谷箕作本『海国図志 籌海篇』は『市中取締続類集 [136] 書籍之部』（DOI：10.11501/2588663）の「四十一」64～71コマに記載がある。

図 5

『海国図志』五十巻本 愛知大学豊橋図書館所蔵（請求記号：292.4.W90）第一冊六十四葉才、部分

必樂從者又一威足懾之利足懷之公足服之有不食
桑甚而革鴉音者乎水師之通賄不懲商胥之浮索不

図 6

『海国図志』六十巻本 萩市立秋図書館所蔵（請求記号：290.9）第一冊六十二葉才、部分

懾之利足懷之公則服之有不食桑甚而革鴉音者乎
水師之通賄不懲商胥之浮索不革戰艦之武備不競

図 7

『海国図志』六十巻本 東京都立中央図書館特別文庫室所蔵（請求記号：市村文庫390-1W-1）第一冊六十二葉才、部分

足懾之利足懷之公則服之有不食桑甚而革鴉音者
乎水師之通賄不懲商胥之浮索不革戰艦之武備不

服

図7一部拡大
右下「ヒ」の上
に読者による
ものと思われる
「又」の書き
入れあり。

図 8

『海国図志 籌海編』国立公文書館所蔵（請求記号：292.0.199.1）下冊六十二葉才、部分

足懾之利足懷之公則服之有不食桑甚而革鴉音者
乎水師之通賄不懲商胥之浮索不革戰艦之武備不

7個について具体的にみると附表1のとおりである。

附表1に列挙した7個のうち4個は「恐」すなわち「おそらくは」と記述していることから、校正した塩谷宕陰は1847年版を見ることができなかったことが考えられる。ほかの頭注11個については、うち9個は1847年版・1849年版・塩谷箕作本ともに同じ字を使っており、1個は塩谷箕作本のみ誤字になっていて、1個は「総目」の「卷十五西南洋諸国」の上に「闕」とあるのみである。なお、これら1849年版にみられる誤字は、後の100巻本では全て1847年版と同じ字に修正されている⁽¹⁰⁾。

2 『海国図志 俄羅斯国・普魯社国』全3冊

『海国図志 俄羅斯国・普魯社国』（国立公文書館所蔵、請求記号：292-0194）は60巻本の「卷三十六」「卷三十七」「卷三十八」を翻刻したもので、第1冊「俄羅斯国上」、第2冊「俄羅斯国下」（以上ロシアに関する内容）、第3冊「普魯社国全」（プロシアに関する内容）の合計3冊から成る。第2冊「俄羅斯国下」の最後に塩谷宕陰の跋文「書俄羅斯図志後」と「再書俄羅斯図志後」がつく。「再書俄羅斯図志後」には年月がないが、「書俄羅斯図志後」の最後には「安政二年乙卯春三月」（1855年）とある。第3冊「普魯社国全」の奥付には「安政二年乙卯八月」とあり、森（1968：61）によれば売り広め許可が出たのは安政二年十二月である。頭注は全部で123個ある。うち、36個について、1849年版は誤字のままであるのに対し、1847年版は頭注が指摘したとおりの正しい字となっている。その36個について具体的にみると附表2のとおりである。

附表2に列挙した36個のうち10個は「恐」すなわち「おそらくは」とし、1個は「疑」すなわち「うたがうらくは」としていることから、『海国図志 俄羅斯国・普魯社国』についても、校正者は正しい字を掲載している1847年版を確認することができなかったといえる。

さらに『俄羅斯国・普魯社国』では、頭注における誤字の指摘自体は正

(10) 『海国図志』100巻本は国立国会図書館所蔵本（請求記号：170-1）を確認した。中国国家図書館所蔵本（請求記号：地900/875.5）および大阪府立中之島図書館所蔵本（請求記号：364-18）も確認したが、この二つの版本は刊記に「咸豐壬子」すなわち1852年と書かれているが、「同治七年五月」すなわち1868年の陳善の「重刊海国図志序」が掲載されていることから、1852年版ではなくより後の版本である。

しいが、校正後の字が1847年版と異なっている箇所がある。これらは附表3に列挙したとおり、全頭注123個のうち4個が該当している。

たとえば附表3の1行目本文中の「征王」は意味が通らないため、正しくは「征伐」であろうとする頭注の指摘は、誤字の指摘自体は正しいが、1847年版では「征戦」となっており、校正後の字とは異なる。同様のケースが4個あった。もし当時、1847年版の60巻本を見ることができていたならば、頭注が1847年版と同じ字へと校正していたはずである。このことから校正者は1847年版を見ることができなかったと言える。

3 『海国図志 英吉利国』全3冊

『海国図志 英吉利国』（国立公文書館所蔵、請求記号：292-0193）は60巻本の「卷三十三」「卷三十四」「卷三十五」を翻刻したもので、第1冊「英吉利国上」、第2冊「英吉利国中」、第3冊「英吉利国下」（以上イギリスに関する内容）の合計3冊から成る。第1冊「英吉利国上」の最後に塩谷宕陰の跋文「書英吉利図志後」と「再書英吉利図志後」がつく。「再書英吉利図志後」には年月がないが、「書英吉利図志後」の最後には「安政二載歲次施蒙単闕臯月上弦」とある。第3冊「英吉利国下」の奥付には「安政三年丙辰八月刻」とあり、森（1968：62）によれば売り広め許可が出たのは安政四年正月（1857年）である。頭注は全部で55個ある。うち、14個について、1849年版は誤字のままであるのに対し、1847年版は頭注が指摘したとおりの正しい字となっている。その14個の具体例は附表4のとおりである。

『英吉利国』も『俄羅斯国・普魯社国』および『籌海篇』と同様、1849年版との共通箇所が多く見られることから、1849年版をもとに翻刻されたといえる。

ひとつ特殊な事例として、1849年版に空白となっている部分に、塩谷・箕作が正しいと思われる字を補った箇所がある。1849年版「卷三十四・英吉利所属愛倫国附記」にアイルランドの地域名を箇条書きにした箇所があるが、その19葉ウ9に“部”とだけ書かれた場所がある。塩谷箕作本はこの箇所の頭注に「郭字原闕今据四界補（郭の字、もとは闕なり、今四界にもとづき補う）」と指摘し、1849年版の“部”を「郭部（右フリ

ガナ：コルク)」に修正している。「四界」とは“部”の下割注にある周囲の地域名のことで、「東界哇達活（右フリガナ：ワートルホルト）、南界海、西界加里（右フリガナ：ケルリー）、北界離敏里（右フリガナ：リメリク）」と書かれており、それぞれ東西南北に隣接する地域名（南に隣接するのは海）に相当する。このようなヒントを手がかりに、当時の地理に関する知識をもってすれば、“部”と書かれた地域がどこであったかがわかる。たとえば、1851年の箕作阮甫による『八紘通誌』第1冊「卷一」の巻頭に織り込まれた欧羅巴図をみれば、南を海に接し、東にワートルホルト、西にカルワイ、北にリメリックがある地域といえば、最南端のコルキという地域だという判断ができる⁽¹¹⁾。よって、翻刻のもとにした1849年版が“部”となっていたにもかかわらず、「郭」の字を補って「郭部」と修正することができたわけである。しかし、1847年版の「卷三十三」19葉ウ9をみると“郭部”と書かれているため、もし翻刻する際に1847年版を底本としていれば、最初から修正する必要はないうえに、「今据四界補」という理由も不要となる。このような事実からも、塩谷・箕作が1847年版を見ることができず、1849年版をもとに翻刻した事実が浮き彫りになってくる。

4 塩谷箕作本の校正における工夫

以上、塩谷箕作本の三種は、全て1849年版の誤字を受け継いで翻刻されており、その誤りを指摘し、正しいと考えられる字を提示するためのさまざまな工夫が見られた。文脈から正しい字を推測したり、地理に関する知識を活用して周囲の情報から抜けた字を補ったりと、臨機応変に対処していたことが窺われる。正確性の高い1847年版を見ることができていれば、あるいは翻刻の底本として1847年版を使っていれば、このような校正の苦労も必要なかったはずである。

(11) 『八紘通誌』第1冊は、飯田市立図書館堀家蔵書本（分類：3 中国史・世界地理、番号：81）を閲覧した。

IV そのほかの塩谷箕作本とされる和刻本について

1 アメリカ合衆国の部分を収録した和刻本・和解本

『海国図志』60巻本は「巻三十九」から「巻四十三」にかけて、南北アメリカ大陸における各地域や国の情報を収録している。なかでも「巻三十九」はアメリカ合衆国に関する記述を収録しており、複数の和刻本・和解本の底本となった。これは、ペリー来航後のアメリカ合衆国に対する知識需要の高まりが原因と考えられる。この種の和刻本・和解本は、鮎澤(1953:139-153)の述べるところによれば、以下の九種があるという。訓点者あるいは訓訳者と書名・冊数・刊行年を列挙すると次のとおりである。

- ①中山伝右衛門『海国図志 墨利加洲部』八巻六冊（嘉永七年・1854年以下同じ）
- ②広瀬達『亜米利加總記』一卷一冊（嘉永七年）
- ③広瀬達『続亜米利加總記』二巻二冊（嘉永七年）
- ④広瀬達『亜米利加總記後編』三巻二冊（嘉永七年）
- ⑤正木篤『美理哥国総記和解』一卷一冊（嘉永七年）
- ⑥正木篤『美理哥国総記和解』上中下三冊（嘉永七年）
- ⑦正木篤『墨利加洲沿革総説総記補輯和解』一冊（嘉永七年）
- ⑧皇国隠士『新国図志通解』四冊（嘉永七年）
- ⑨皇国隠士『西洋新墨誌』四巻二冊（嘉永七年）

上記リストには含まれていないが、塩谷箕作本の『墨利加洲部』が存在することに言及する先行研究がいくつかあるため、次項にて詳述する。

2 塩谷箕作本『墨利加洲部』の存在を示唆する先行研究

尾佐竹(1932:54)は「幕末の俊傑、川路聖謨が塩谷宕陰に命じて翻刻せしめ、箕作阮甫が、これを補けたのである」と述べ、塩谷・箕作の成果の一つとして『墨利加洲部』五冊は同年四月」と挙げている。また、大庭(1967:196)は「嘉永七年、巻頭の籌海編二冊および墨利加洲二冊が

山県教授江戸塩谷宕陰訓点、津山箕作庠西の洋音注によって出版された」とし、塩谷箕作本『墨利加洲部』の存在を認め、出版時期については「墨利加洲の部は嘉永七年甲寅四月、出雲寺文太郎他の刊記がある」と述べている。遠藤（1987：93）は鮎澤（1953：139-140）を根拠とするも「幕府の開明派官僚、川路聖謨の命で、儒者塩谷宕陰が訓点を附し、蘭学者箕作阮甫が洋音註を施した版で、こちらは1854年7月以降に開板された」とする。

一方、鮎澤（1953：139）は『海国図志墨利加洲部』について、「尾佐竹猛氏の「近世日本の国際観念の発達」によれば塩谷・箕作の刊行した「海国図志」翻刻の一つに加えられているが、筆者（引用注：この文の筆者は鮎澤信太郎氏）の蔵本は巻八の終りに「中山伝右衛門校正」とあって、塩谷、箕作らの名を見出すことができない。（中略）塩谷、箕作本の一行に入れるためにはそこに少なからぬ無理がある」とし、塩谷箕作本『墨利加洲部』の存在を認めることに難色を示している。

森（1968）は書籍の売り広め願いを記録した『市中取締續類集』に塩谷箕作本『墨利加洲部』の記載が確認できないため、塩谷箕作本の『墨利加洲部』に触れていない。

鮎澤（1953）あるいは森（1968）の成果を参照すれば、塩谷箕作本の『墨利加洲部』は存在しないことが前提となるはずである。しかし一方で、全国の図書館目録にはその存在が確認できることから、次節より目録に見える塩谷箕作本『墨利加洲部』について論じる。

3 塩谷箕作本『墨利加洲部』の存在を示唆する目録情報

全国漢籍データベースの目録データによると⁽¹²⁾、関西大学図書館と島根県立図書館に塩谷箕作本の『墨利加洲部』が所蔵されていることが確認できる。このうち、筆者は関西大学図書館所蔵の資料のみ現物確認することができた。

関西大学図書館所蔵の『墨利加洲部』2巻2冊は⁽¹³⁾、全体に訓点と一部

(12) 全国漢籍データベース (<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kanseki>) の検索による。検索日：2021/4/12

(13) 関西大学図書館の請求記号は LH2-2 03-12。

和刻本『海国図志』諸版における底本の校正に関する一考察

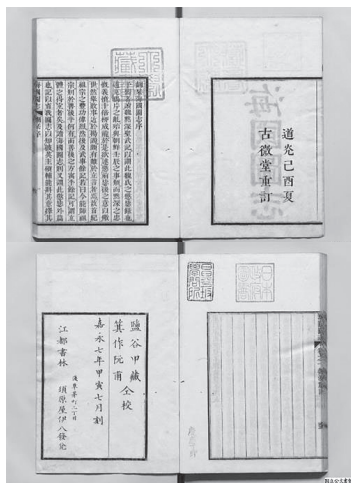


図9. 塩谷箕作本『籌海篇』
上・下全2冊
(国立公文書館請求記号：292-0199イ)

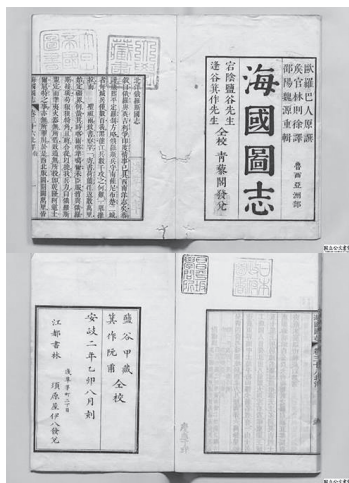


図10. 塩谷箕作本
『俄羅斯国・普魯社国』全3冊
(国立公文書館請求記号：292-0194)

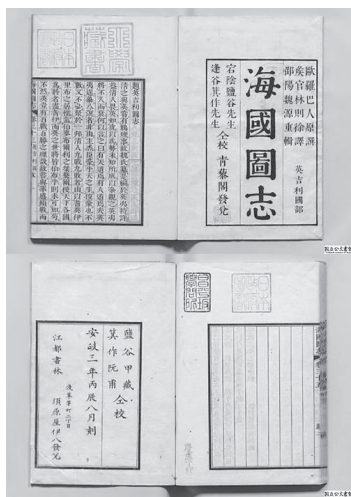


図11. 塩谷箕作本『英吉利国』
全3冊
(国立公文書館請求記号：292-0193)

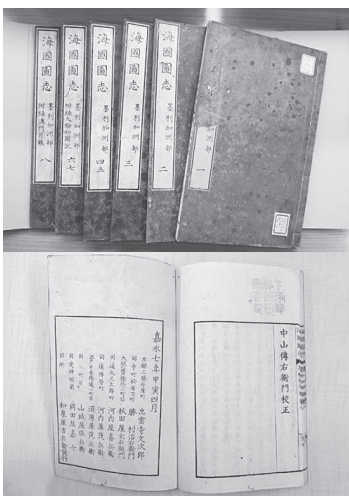


図12. 中山本『墨利加洲部』
全6冊
(飯田市立図書館堀家蔵書請求記号：2068)

地名に傍訓が施されているのみで、頭注はなく、中山伝右衛門『海国図志墨利加洲部』8巻6冊（以下、中山本と称す）の第1冊（巻一）・第2冊（巻二）と全く同じである⁽¹⁴⁾。

島根県立図書館所蔵の『海国図志存六巻 巻一至五・八 墨利加洲部』「清魏源撰 塩谷宕陰等校 嘉永七年刊 5冊」は⁽¹⁵⁾、島根県立図書館のレファレンスサービスに質問したところ、この版本に頭注のないこと、また第8巻の最後に「中山伝右衛門校正」と書かれている旨の回答を得た。島根県立図書館所蔵のものも中山本と同じであると判断してよいと考える。

つまり、塩谷箕作本『墨利加洲部』の存在に言及する先行研究や目録情報が見られるが、実際に所蔵されているものは中山本であり、現時点で塩谷箕作本の『墨利加洲部』は確認できなかった。

4 中山本『墨利加洲部』について

中山本は8巻6冊であるが、6冊が同時に市中に出たわけではない。森(1968: 58-59)によると、最初の2冊は草稿完成が嘉永七年(1854年)三月、売り広め許可が出たのは嘉永七年六月で、残りの4冊については草稿完成が同三月、売り広め許可が出たのは嘉永七年七月である。売り広め許可の時期が一月ずれているためか、現在の日本各地の図書館における中山本の所蔵状況は、2冊のみ所蔵する場所と、6冊全て所蔵する場所にわかれる。原資料を確認すると、最初の2冊のみ見ただけでは、訓点や傍訓を施した人物が誰であるかはわからない。第2冊の最後に複数の書肆の刊記があるのみである⁽¹⁶⁾。後に出た第6冊の最後(38葉ウ)には「中山伝右衛門校正」とあり、巻末には第2冊の最後と同じ刊記がある。よって、塩谷箕作本の『墨利加洲部』の存在を認めた先行研究は、中山本の最初の2冊のみを見て、校正者名が見当たらないために、推測で塩谷・箕作による

(14) 中山本8巻6冊は飯田市立図書館所蔵の堀家蔵書本（請求記号：2068）を閲覧した。

(15) 島根県立図書館の請求記号は史154。

(16) 中山本第二冊の刊記は「嘉永七年甲寅四月」の後に複数の書肆名が列举される。書肆名は「京都三条通升山町 出雲寺文次郎、同寺町松原下ル町 勝村治右衛門、大坂心斎橋北へ二町目 秋田屋太右衛門、同通北久太郎町 河内屋喜兵衛、同通博労町 河内屋茂兵衛、江戸日本橋通町一丁目 須原屋茂兵衛、同二丁目 山城屋佐兵衛、同芝神明前 岡田屋嘉七、同所 和泉屋吉兵衛発行」である。

ものと判断したと考えられる。実際に、『墨利加洲部』を塩谷箕作本とする尾佐竹（1932：54）は、中山本の存在に言及していない。尾佐竹（1932：54）も大庭（1967：196）も塩谷箕作本の『墨利加洲部』の刊行時期を「嘉永七年四月」としているため、これも中山本第2冊の刊記から判断したものと考えられる。よって、現時点では塩谷箕作本の『墨利加洲部』は存在しないものと結論づけることが妥当であろう。

中山本が底本とした版本についても、本論文のⅢ節の文字の異同による底本の判別手法が活用できる。まず、第1冊「海国図志墨利加洲部目録」の最終行に「彌利堅国記下」と書かれた部分を確認すると、1847年版はそこが“彌利堅国総記下”となっている。一方で1849年版は“彌利堅国記下”であるため、この部分は中山本と1849年版が一致していることがわかる。前の行には1847年版・1849年版・中山本ともに「彌利堅国総記上」と書かれているため、本来は「彌利堅国総記」の「上」と「下」で対応しているべきところが、1849年版と中山本は「総」が抜けてしまっているのである。

さらに、中山本第1冊4葉オ4に「直至明代西洋明理之遙士思地圓如球」とあるが、この部分は1847年版が“直至明代西洋明理之士遙思地圓如球”となっており、“遙士”と“士遙”の部分が逆転している。文の構造からいえば“明理之士”が主語で、“遙思”が述語（動詞）、“地圓如球”が目的語であり、1847年版が正しいと考えられる。これについても、1849年版が“直至明代西洋明理之遙士思地圓如球”となっており、中山本がこれに従ったことは明白である。よって、中山本の底本とした版本も1849年版であることがいえる。

おわりに

『海国図志』は幕末の日本へ舶載され、1854年から陸續と二十数種類の和刻本が刊行された。先行研究は和刻本の底本を60巻本、あるいは1849年版であるとしてきたが、1847年版との間にある文字の異同が具体的に比較対照されたことはなく、またその文字の異同を和刻本がどのように処理したかの考察はなかった。塩谷宕陰による頭注を手がかりに1847年版・

1849年版・塩谷箕作本を照合すると、塩谷箕作本が1849年版を底本として翻刻されたことは文字の異同の共通性という観点からも疑う余地のないことがわかる。また、底本の1847年版と1849年版に見える文字の異同を具体的に確認すると、1847年版のほうが誤りの少ない、より正確な字句の多いことがわかった。さらに、塩谷箕作本の頭注の内容を根拠とすれば、校正者が1847年版を未見のまま校正していたことは明らかである。

『海国図志』の本文テキストを取り扱う際にはさまざまな背景を考慮に入れなければならない。一般的に、『海国図志』が従前の漢訳洋書などの諸本の引用から成る以上、本文を論じる際にはその引用元までたどる必要がある。この引用元にたどる必要性は『海国図志』の成立に関する問題の一つとして位置づけることができる。一方、本論文が論じたのは、『海国図志』原本の版本と和刻本との間の比較を通じた、具体的な文字の異同の確認と和刻本の校正状況である。これは、日本における『海国図志』の受容に関する問題の一つに位置づけることができるだろう。

附表1. 塩谷箕作本『海国図志 籌海篇』の頭注で修正された字と
1847年版の字が一致する箇所

	掲載箇所	1847年版	1849年版	塩谷箕作本 (カッコ内は頭注)
1	上冊20葉ウ 8	湖中	湖申	湖申（申當作中）
2	下冊31葉オ 3	烏	烏	烏（烏当作烏）
3	下冊36葉ウ 7	軀逐之	軀逐之	軀逐之（軀恐當作軀）
4	下冊49葉ウ 2	伴作商舟	洋作商舟	洋作商舟（洋恐伴）
5	下冊57葉ウ 9	公其其局	公其其局	公其其局（公其之其恐當作司）
6	下冊62葉オ 7	則服之	則肱之	則肱之（肱恐服之壞體）
7	下冊62葉オ 8	不懲	不懲	不懲（懲當作懲）

附表2. 塩谷箕作本『海国図志 俄羅斯国・普魯社国』の頭注で修正された字と1847年版の字が一致する箇所

	掲載箇所	1847年版	1849年版	塩谷箕作本 (カッコ内は頭注)
1	1冊10葉ウ4	時入鈔掠	時人鈔掠	時人鈔掠 (人當作入)
2	1冊12葉オ4	八千五百十二口	八十五百十二口	八十五百十二口 (下八十之十恐千字)
3	1冊12葉オ6	天寒多冰雪	天寒多冰雲	天寒多冰雲 (雲當作雪)
4	1冊12葉オ7	道光九年	道光力年	道光力年 (力當作九)
5	1冊14葉ウ4	南界俄羅斯	南界俄羅斯	南界俄羅斯 (俄羅斯當作俄羅斯 儼或云王恐土之悞)
6	1冊17葉ウ5	三萬三千三百	三萬三十三百	三萬三十三百 (三十當作三千)
7	1冊18葉ウ8	土番俱額力教	土悉俱習額力教	土悉俱習額力教 (悉當作番)
8	1冊21葉オ4	七千五百五十七	七千五而五十七	七千五而五十七 (而當作百)
9	1冊21葉オ8	查尼俄甫部	查尼俄南部	查尼俄南部 (俄南當作俄甫)
10	1冊22葉ウ9	水耶	水耶	水耶 (水耶水耶之悞)
11	1冊24葉オ2	水耶	水耶	水耶 (水據下文當作水)
12	1冊24葉オ7	改用磚石	改男磚石	改男磚石 (男恐用之悞)
13	1冊27葉オ9	機土臘	機土臘	機土臘 (土當作土)
14	1冊30葉オ2	烏彌河口	烏彌河口	烏彌河口 (烏恐烏)
15	1冊30葉オ5	恐生内患	殺生内患	殺生内患 (殺字疑當作恐字)
16	2冊1葉ウ4	阿爾泰嶺	阿爾泰嶺	阿爾泰嶺 (秦當作泰)
17	2冊3葉ウ1	紅銅錢	紅銅銀	紅銅銀 (銅銀之銀恐當作錢)
18	2冊5葉ウ8	謙州	謙川	謙川 (謙川之川州之悞)
19	2冊7葉オ7	二十三代	二十三伐	二十三伐 (伐當作代)
20	2冊7葉オ8	一道曰	十道曰	十道曰 (十恐一)
21	2冊7葉ウ5	大者曰	大者田	大者田 (田當作曰)
22	2冊10葉ウ6	滕吉思湖	勝吉思湖	勝吉思湖 (勝作滕)
23	2冊10葉ウ9	在楚庫柏興北五百餘里	在楚庫柏五百餘里	在楚庫柏五百餘里 (一統志栢字下有興北字可從)
24	2冊11葉オ2	有洲曰鄂遼漢	有洲一鄂遼漢	有洲一鄂遼漢 (一鄂之一字一統志作曰可從)
25	2冊15葉オ1	視其刀柄	視其刀柄	視其刀柄 (柄當作柄)

26	2 冊20葉オ 3	俗間小説	俗間小説	俗間小説 (聞當作間)
27	2 冊26葉ウ 8	墨爾根	黑爾根	黑爾根 (黑爾之黑當作墨)
28	2 冊31葉ウ 1	嘉慶十三年	嘉慶十三王	嘉慶十三王 (三王之王當作年)
29	3 冊 3 葉オ 1	波新部	波部部	波部部 (波部之部字當作斯若新)
30	3 冊 4 葉オ 2	火腿	矣腿	矣腿 (矣腿恐火腿)
31	3 冊 7 葉ウ 4	匿士	匿土	匿土 (匿土恐匿士)
32	3 冊13葉オ 5	西北界那威	面北界那成	面北界那成 (面當作西成當作威)
33	3 冊17葉オ 7	軟盟誓死	挿盟誓死	挿盟誓死 (挿恐軟)
34	3 冊17葉ウ 6	英軍排艦	英車排艦	英車排艦 (車恐軍)
35	3 冊19葉オ 4	國軍共計四萬丁	國軍其計四萬丁	國軍其計四萬丁 (上其當作共)
36	3 冊20葉オ 5	千六百五十八隻	千六百五十人隻	千六百五十人隻 (人當作八)

附表 3. 塩谷箕作本『海国図志 俄羅斯国・普魯社国』の頭注で修正された字と 1847年版の字が一致しないが誤字であるとの指摘自体は合っていた箇所

	掲載箇所	1847年版	1849年版	塩谷箕作本 (カッコ内は頭注)
1	1 冊23葉オ 3	征戦	征王	征王 (征王恐當作征伐)
2	3 冊 3 葉ウ 3	阿那洼	阿那注	阿那注 (阿那注之注字宜作汪下皆同)
3	3 冊 5 葉オ 4	赦罕	赦亨	赦亨 (赦當作郝)
4	3 冊19葉オ 7	在巔上	在與上	在與上 (與恐巔之誤)

附表 4. 塩谷箕作本『海国図志 英吉利国』の頭注で修正された字と 1847年版の字が一致する箇所

	掲載箇所	1847年版	1849年版	塩谷箕作本 (カッコ内は頭注)
1	1 冊13葉オ 8	士都軋	士都軋	士都軋 (軋當依下文改軋)
2	1 冊19葉ウ 9	郭部	部	郭部 (郭字原闕今据四界補)
3	2 冊13葉ウ 3	奸究莫測	奸究莫測	奸究莫測 (究當作宄)
4	2 冊14葉オ 1	精巧絶倫二十四年	精巧絶十四年	精巧絶十四年 (絶下空格疑是倫二二字)

5	2冊17葉ウ6	為上次	為土次	為上次（為土之土當作上）
6	2冊17葉ウ8	定期開看	定期聞看	定期聞看（聞恐開）
7	2冊20葉オ2	約束	約束	約束（東當作束）
8	2冊21葉オ3	杼中國	杼中國	杼中國（杼當作杼）
9	3冊2葉ウ5	即唧肚也	即唧肚也	即唧肚也（唧唧誤）
10	3冊3葉オ9	斜上	斜土	斜土（斜土當作斜上）
11	3冊7葉ウ4	回帆徑去	回帆徑去	回帆徑去（帆當作帆）
12	3冊9葉ウ7	而華民	面華民	面華民（面 ^マ 恐而）
13	3冊15葉オ7	飛章入	飛章人	飛章人（人恐當作入）
14	3冊19葉ウ3	寧波天津	寧波天淳	寧波天淳（淳恐當作津）

参考文献

- 阿川修三（2011）『『海国図志』と日本 塩谷世弘、箕作阮甫の訓点本について』『言語と文化』文教大学大学院言語文化研究科付属言語文化研究所 23号、1-15頁
- 荒川清秀（1997）『近代日中学術用語の形成と伝播——地理学用語を中心に』白帝社
- 荒川清秀（2018）『日中漢語の生成と交流・受容 漢語語基の意味と造語力』白帝社
- 遠藤泰生（1987）「黒船騒動下のアメリカ学——1854年「海国図志」翻刻をめぐって」『比較文学研究』東大比較文学会 51号、90-102頁
- 大谷敏夫（2015）『魏源と林則徐 清末開明官僚の行政と思想』山川出版社
- 大庭脩（1967）『江戸時代における唐船持渡書の研究』関西大学東西学術研究所
- 尾佐竹猛（1925）『維新前後に於ける立憲思想』文化生活研究会
- 尾佐竹猛（1932）『近世日本の国際観念の発達』共立社
- 尾佐竹猛（1934）『維新前後に於ける立憲思想の研究』中文館書店
- 鮎澤信太郎（1953）「世界地理の部」開国百年記念文化事業会編『鎖国時代日本人の海外知識 世界地理・西洋史に関する文献解題』乾元社、2-367頁
- 佐々木正哉（1985）「『海国図志』余談」『近代中国』巖南堂書店 17巻、143-184頁
- 下河部行輝（2000）「『四洲志』と魏源増補による『海国図志』（1）書誌的な比較による『四洲志』の本文の検討」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』

岡山大学大学院文化科学研究科 10号、368-356頁

田野村忠温 (2019) 「言語研究資料としての近代中国地理文献彙集の信頼性——『海国図志』と『小方壺齋輿地叢鈔』」『或問』近代東西言語文化接触研究会 36号、1-10頁

中村久四郎 (1915) 「近世支那の日本文化に及ぼしたる勢力影響 (第八回完結)」『史学雑誌』史学会 26編 2号、1-42頁

増田渉 (1979) 『西学東漸と中国事情—「雑書」札記—』岩波書店

源了圓 (1993) 「幕末・維新时期における『海国図志』の受容——佐久間象山を中心として」『日本研究』国際日本文化研究センター 9巻、13-25頁

茂木敏夫 (2013) 「『海国図志』成立の背景——十八・十九世紀中国の社会変動と経世論」『東京女子大学紀要論集』東京女子大学論集編集委員会 64巻 1号、87-102頁

森睦彦 (1968) 「『海国図志』の舶載から翻刻まで」『蘭学資料研究会研究報告』蘭学資料研究会 206号、55-64頁

方诗铭・方小芬编著 (1987) 《中国史历日和中西历日对照表》上海辞书出版社

資料目録

『海国図志』50巻本 (1844年版)

愛知大学豊橋図書館 (請求記号: 292.2:W90)

中国上海図書館 (請求記号: 003604)

『海国図志』60巻本 (1847年版)

台湾成文出版社影印本

中国国家図書館 (請求記号: 地900-875.2)

萩市立萩図書館 (請求記号: 290-カ2)

『海国図志』60巻本60巻本 (1849年版)

東京都立中央図書館特別文庫室 (請求記号: 市村文庫390-IW-1)

『海国図志』100巻本 (1852年版)

国立国会図書館 (請求記号: 170-1)

『海国図志』100巻本 (1868年序文)

中国国家図書館 (請求記号: 地900/875.5)

大阪府立中之島図書館 (請求記号: 364-18)

『海国図志 英吉利国』

- 国立公文書館（請求記号：292-0193）
『海国図志 俄羅斯国・普魯社国』
国立公文書館（請求記号：292-0194）
『海国図志 籌海篇』
国立公文書館（請求記号：292-0199 イ）
『海国図志 墨利加洲部』
飯田市立図書館堀家蔵書 8 卷 6 冊（請求記号：2068）
関西大学図書館 2 卷 2 冊（請求記号：LH2-2.03-12）
『市中取締續類集 書籍之部』
国立国会図書館（請求記号：812-4）
『八紘通誌』
飯田市立図書館堀家蔵書（請求記号：81）
The Chinese Repository, No. 16. 1847.
丸善複製本
Wylie, A. (1867). *Notes on Chinese Literature*.
愛知大学豊橋図書館所蔵本（請求記号：920.2:W98）